太宰治「走れメロス」論
―反美談としての読解の試み―

安原　杏佳音

はじめに

小説「走れメロス」は『新潮』昭和十五年五月号に掲載され、同年六月、河出書房刊行の『女の決闘』に収録された。その後中学校の国語教材に登場した「走れメロス」は現在に至るまで多くの教科書に採録され続け、「ビッグ教材」の地位を誇っている。それにはこの作品がメロスとセリヌンテイウスの友情を通して「義」や「信実」といったテーマを描いた、いわゆる「美談」であることが大きな要因となっているのであろう。文学研究の面からも、「走れメロス」研究史初期においては作品のテーマを「友情」「信実」「美」とした解釈が中心となり、メロスや王の人物形成の読解に重点が置かれている。(1)

しかし発表年である昭和十五年という年に目を向けると、「走れメロス」は単なる友情や信実を描いた「美談」とは異なる面を露わにしてくる。それは当時氾濫していた国策文学としての「美談」群に対するアンチテーゼとしての、いわば「反美談」としての姿である。

ここで、「走れメロス」発表前後の時代状況について簡単に触れておく。昭和六年九月の満州事変、さらに昭和十二年九月の日中戦争に始まり、昭和十六年の太平洋戦争、昭和二十年のドイツ無条件降伏、ついで日本の無条件降伏による戦争終結に至るまでの過程は、宣戦布告なき実質戦争を含む。日本国内においては政府が各界の代表を集め国論の一致をはかり、国民に対しては国民精神総動員計画実施要項を示して、非常時の自覚を促し消費の節約を呼びかけた。また、こうして敷かれた戦時体制には文壇も速やかに反応し、やがて多くの文学者がこれに協力する姿勢を見せた。その結果、昭和十二年九月の日中戦争から日本の敗戦によって戦争終結を見た昭和二十年にかけて「国策文学」が多く産出された。

命の惜しくない者は誰も居ない。私も人一倍生命が惜しい。生命こそは最も尊きものである。然るに、この戦場に於て、何かしら、その尊い生命を容易に棄てさせるものがある。(中略)捨てて悔いさせないものがある。(中略)兵隊は、人間の抱く凡庸な思想を乗り超えた。死をも乗り超えた。それは大いなるものに向つて脈々と流れ、もり上つて行くものであるとともに、それらを押し流すひとつの大いなる高き力に身を委ねることでもある。又、祖国の行く道を祖国とともに行く兵隊の精神でもある。私は弾丸の為にこの支那の土の中に骨を埋むる日が来た時には、何よりも愛する

祖国のことを考へ、愛する祖国の万歳を声の続く限り絶叫して死にたいと思つた。（傍線引用者、以下同）

右に引用したのは『改造』昭和十三年八月号に掲載された火野葦平「麦と兵隊」の一節である。[2] 黒古一夫はこのような火野伍長の考えこそが戦争を推進してきた人たちが最も「歓迎」すべきものだったと指摘し、火野葦平は「戦争の時代」にあって、人々を戦争へと駆り出す役割を演じたとしている。[3] その要素は傍線を付した箇所を中心に顕著に見て取れるだろう。

このような戦時下の状況をあらわす事例として、「走れメロス」発表年からは少々遡るが、「爆弾三勇士」ブームについても触れておきたい。爆弾三勇士とは、日本陸軍独立工兵第十八大隊の江下武二、北川丞、作江伊之助各一等兵三名を指す。第一次上海事変中の昭和七年二月、国民革命軍が上海郊外の廟行鎮に築いた陣地の鉄条網に対し突撃路を築くため、点火した破壊筒を持って敵陣に突入爆破し、自らも爆死した。その事件が同月二十四日付「東京朝日新聞」で報道され、複数の新聞紙上で「三勇士の歌」の公募が行われた。また流行はそこに留まらず映画、演劇化も数多くなされ、国民的一大ブームとなった。

中川雄介・加藤千香子は「爆弾三勇士」がそうした一大ブームとなったことを転機に、それまでのモダニズム文化にかわって勇壮果敢な「日本男児」を称揚する傾向が強まったとしている。[4] 中川・加藤によるとその第一報で最も強調されたのは「身体一ぱいに爆弾を巻きつけ点火」し鉄条網に突撃したという行動のインパクト、及びその行為を成し遂げた三人の「男らしさ」だったという。記事の表現も「爆弾諸共に木端微塵に粉砕されて、活動写真に見られる事実以外としてあり得ぬやうな壮烈極まりなき空前の戦死」と過激なもので、死を恐れない三人の豪胆さが際立たせられている。また、中内敏夫はそうした三勇士の戦死が「軍国美談」として、教育の場において称揚されていった経緯について述べている。[5]

そうした「軍国美談」はその後も続々と生まれ、「忠勇武烈」な戦死[6]を共通項に持つ数多くの「勇士」や「軍神」伝説が形成されていった。

本論ではこうした戦時下としての同時代状況を読解の補助線に用いながら、「走れメロス」とその原典であるシラー作「人質」との比較検討を行い、「走れメロス」読解に新たな端緒をひらくことを試みる。

一　作者言及

「走れメロス」の末尾には「古伝説と、シルレルの詩から。」という一文がある。この「シルレル」とはドイツ古典主義の代表的詩人・劇作家であるフリードリヒ・フォン・シラーを指し、「シルレルの詩」とはシラー作の譚詩「人質」（一七九八年）である。この「人質」はシラーがローマ作家ヒュギヌス Hyginus（前六四―一七）の作品『説話集』（一六七四）内の「寓話（Fabel）」を基に執筆した譚詩であり、[7] 日本にも複数名の訳者により伝えられた。その中でも太宰が「走れメロス」執筆にあたり参照したのは小栗孝則訳『新編シラー詩抄』（昭和十二年改造文庫）であると、角田旅人の詳細な調査によって明らかにされている。[8]

太宰は「走れメロス」発表以前から、シラーについて言及していた。

次に、二つの随筆を引用する。

それでは学生本来の姿は、どのやうなものであるか。それに対する答案として、私はシルレルの物語詩を一篇、諸君に語りませう。シルレルはもつと読まなければいけない。／今のこの時局に於ては尚更、大いに読まなければいけない。おほらかな、強い意志と、努めて明るい高い希望を持ち続ける為にも、諸君は今こそシルレルを思ひ出し、これを愛読するがよい。（「心の王者」昭和十五年一月二十五日慶應義塾大学学校新聞『三田新聞』）

世の中の、どこに立つて居るのか、どこに腰掛けて居るのか、甚だ曖昧なので、学生たちは困つて居る。世の中のことは何も知らぬふりして無邪気をよそほひ、常に父兄たちに甘えて居ればいいのか。又は、それこそ、「社会の一員」として、仔細らしい顔をし、世間の大人の口吻を猿真似して、大人の生活の要らざる手助けに努めるのがいいのか。いづれにしても不自然で、くすぐつたく、落ちつかないのである。（中略）先日、或る学生に次のやうなシルレルの物語詩を語つて聞かせたところ、意外なほどに、其の学生は喜んだ。諸君は、今こそ、シルレルを読まなければなるまい。素朴の叡智が、どれほど強力に諸君の進路を指定してくれるものであるかを知るであらう。（「諸君の位置」昭和十五年三月三十日文化学院学校新聞『月刊文化学院』）

どちらも「走れメロス」発表と同時期に学校新聞に寄稿したものであり、俗世における富も資格も持たない詩人こそが神と共にあることを許された、という内容のシラーの詩を紹介している。さらに随筆では学生をその詩人と重ね合わせ、世俗のしがらみに絡め取られてしまう前に、学生としての特権を謳歌せよと訴えているのである。

ここで注目したいのは、「今のこの時局に於ては」や「今こそ」という表現である。これらの表現から、太宰が単なる指南書として学生にシラーを勧めていたのではないことがわかる。太宰は太平洋戦争への傾斜を強める当時の状況の中でこそシラーを読む意義があると訴えていたのであり、そこには同時代に対する何らかの意識が存したと考えられよう。

太宰の同時代状況に対する感慨は、先に引用した二つの随筆とほぼ同時期に発表された「鷗」にもよく表れている。

私は醜態の男である。なんの指針をも持つてゐない様子である。私は波の動くがままに、右にゆらり左にゆらり無力に漂ふ、あの、「群集」の中の一人に過ぎないのではなからうか。さうして私はいま、なんだか、おそろしい速度の列車に乗せられてゐるやうだ。この列車は、どこに行くのか、私は知らない。まだ、教へられてゐないのだ。汽車は走る。轟々の音をたてて走る。（中略）／私には、人を指導する力が無い。誰にも負けぬくらゐに祖国を、こつそり愛してゐるらしいのだが、私には何も言へない。なんだか、のどまで出かかつてゐる、ほんたうの愛の宣言が私にも在るやうな気がするのであるが、言へない。知つてゐながら、言はないのではない。のどまで出かかつてゐるやうな気がするのだが、なん

としても出て来ない。それはほんたうにいい言葉のやうな気もするのであるが、さうして私も今その言葉を、はつきり掴みたいのであるが、あせると尚さら、その言葉が、するりするりと逃げ廻る。私は赤面して、無能者の如く、ぼんやり立つたままである。一片の愛国の詩も書けぬ。（「鷗」昭和十五年一月『知性』）

ここでの「おそろしい速度の列車」とは時代そのものを指すのだろう。時代に対する指針は持っていないとしながらも、「おそろしい速度」で変化していく時代に対する懐疑や恐れが表明されているのだ。そしてその心情は祖国への愛をほのめかしつつも、それをはっきりとは明示できないとする態度へとつながっている。

無論、随筆が作者の心情をそのまま表現したものだとするわけにはいかない。しかし引用した各随筆で直接的に、また間接的に同時代の状況に触れ、それを発表している以上、太宰がそのことについて何らかの意識を持っていたことは明らかである。(9)

二「人質」／「走れメロス」表現比較

本節ではこれまでに概観した同時代状況を視座に「人質」と「走れメロス」との表現比較を行う。始めに結論を述べると、「走れメロス」の主人公メロスには、日本の戦時下を生きた当時の若者を表象する存在としての側面が見出せる。論者が特に注目したのは、「走れメロス」と「人質」とでは主人公が走る動機には大きな違いがあること、「走れメロス」では故郷を発つ際に迷いが描かれていること、そして群衆に讃えられた人物が異なっていることの三点である。なお、必要に応じて「人質」の主人公をメロスA、「走れメロス」の主人公をメロスBとした。

（1）走る動機

まず、二人のメロスが走る動機について比較する。

引用1-A「人質」

①町に帰ることが出来なかつたら
　友達は私のために死ぬのです
②「不憫だが、友達のためだ！」
③今、ここまできて、疲れきつて動けなくなるとは
　愛する友は私のために死なねばならぬのか？
④どうしても間に合はず、彼のために
　救ひ手となることが出来なかつたら
　私も彼と一緒に死のう

引用1-B「走れメロス」

①けふは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやらう。
②私は、今宵、殺される。殺される為に走るのだ。
③身代りの友を救ふために走るのだ。
④王の奸佞邪智を打ち破る為に走るのだ。

⑤若い時から名誉を守れ。
⑥あれが沈んでしまはぬうちに、王城に行き着くことが出来なかつたら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。
⑦「気の毒だが正義のためだ！」
⑧愛する友は、おまへを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。
⑨私は、きつと笑はれる。私の一家も笑はれる。
⑩わづかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。
⑪少しも疑はず、静かに期待してくれてゐる人があるのだ。私は、信じられてゐる。
⑫私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。
⑬私は、正義の士として死ぬ事が出来るぞ。（中略）正直な男のままにして死なせて下さい。
⑭ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走つてゐるのだ。
⑮信じられてゐるから走るのだ。
⑯間に合ふ、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。
⑰私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つてゐるのだ。
⑱メロスの頭は、からつぽだ。何一つ考へてゐない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走つた。

右に引用したのはそれぞれのメロスが走る理由について述べた箇所である。引用文冒頭の番号は論者がプロットの進行に沿って付した。両者を比較すると、メロスAの走る目的は一貫して「友達」のためであるのに対し、メロスBの走る理由は少々複雑であるということがわかる。

メロスBもまた友のために走っていることは③や⑥、⑭などからわかる。しかしそれと同時に、⑤、⑩、⑬などに表れているように「名誉」や「正義」といった言葉も目立つ。「人質」にはそのような言葉は見られず、「正義」や「名誉」は「走れメロス」特有の価値観であると言える。そうした両作品の違いが最も顕著に表れているのは、メロスが山賊に襲われる場面であろう。山賊に襲われた際、メロスAは②「不憫だが、友達のためだ！」と述べるのに対し、メロスBは⑦「気の毒だが正義のためだ！」と述べている。メロスBにとっては友の命を救うこと以上に、自らの理想とする「正義」を実現させることの方が重要なのである。このことは、メロスBが走る動機を考える際の重要な鍵となる。

本文中、メロスBの口から直接的に走る目的について語られる箇所が一箇所ある。それが前掲引用の⑰である。ここで彼の言う「なんだか、もつと恐ろしく大きいもの」とは、何だったのだろうか。この箇所については先行研究でも特に疑問視され、最終的に彼を動かしている「もつと恐ろしく大きいもの」、また⑱「わけのわからぬ大きな力」が何を指すのかについては多様な解釈が提出されてきた。例えば「人間の魂と魂を結び合わせるもの」としての「信実」[10]や「メロス自身の力」[11]、また「神なるものの『力』」[12]や「メロスを生かす力の総体」[13]などがあり、現在もなおこの部分への解釈は揺れている。

だが、前節で見た同時代の状況、そしてメロスBが「正義」のために走っていたということを合わせて考えたとき、この「人の命も問題

でない」とする「恐ろしく大きい」「力」とは「戦争」を指していると言えるのではないか。

前節で引用した火野葦平「麦と兵隊」は、「命の惜しくない者は誰も居ない」としていた。しかしそれでもなお戦場という場においては「その尊い生命を容易に棄てさせるものがあ」り、そうした場におかれた兵隊は「ひとつの大いなる高き力」に「身を委ねる」のである。その「力」とは、戦争、そして戦争を推進する国体そのものであろう。そしてそのような時代状況を考慮したとき、「走れメロス」において満身創痍のメロスが一心に引き寄せられていく「恐ろしく大きいもの」、「わけのわからぬ大きな力」もまた、時代を支配する「戦争」を指し示すと考えられるのである。

ちなみに、⑰、⑱の傍線部は初出稿では「もつと大きい大きいもの」「何かしらの大きな力」だった。それが「もつと恐ろしく大きいもの」、「わけのわからぬ大きな力」に変更され、「恐怖」や「不可知」といった要素が付け加えられることで、メロスが表象する同時代の青年が走る先にあるものはより生々しいものとなっている。

以上のことからメロスBの心象は、前節で触れた国策文学として書かれた「美談」におけるそれと合致すると考えられる。その心象とは、助けることでも助かることでもなく、「正義」としての死を進んで選び取る姿勢である。ここにおいてメロスBは、同時代に発表されていた多くの国策文学に描かれる青年たちと同様、義のために死ぬことを志向していると言える。それはこの時代における「あり得べき」青年像である。

（2）語りの作用

では、なぜメロスBはそのような心象を持つのか、もしくはそのように読み取れるのか。そのような効果をもたらす装置として、「走れメロス」後半部における、メロスが故郷を去った後の語りに注目してみよう。これまでにも語りについての論考は多く提出されているが、中でも高塚雅の分析は示唆に富んでいる。[14] 高塚は語り手を「走れメロス」における「引用者」であるとし、語り手がメロスの「内的独白」[15]を、その語りの内に取り込んでいると指摘する。そのために語り手の語りとメロスの内的独白との見分けがつき難くなり、水を飲んでメロスが回復した場面での「走れ！　メロス」という一文に顕著なように、メロスと語り手の声が混交する事態が生じている、というのである。

しかし、語り手はメロスの内的独白を単純に引用しているだけだろうか。そのような疑問が生じるのは、メロスの内的独白であるとされる箇所の語彙に不自然さを感じるからだ。メロスの内的独白であるとされる箇所に使用される「南無三」「奸佞邪知」「照覧」「韋駄天」などの語彙は、「邪智暴虐」「木端微塵」「獅子奮迅」など、冒頭から「走れメロス」という物語世界を語りによって構築してきた語り手のそれと同質のものであり、無教養な一牧人であるメロスの内的な独語とは感じられないのである。

このことから、本論では語り手はメロスの内的独白を引用しているのではなく、語り手という位置を利用しつつメロスの内面を代弁者であるかのように語っていると解釈する。前掲高塚論は「人質」と「走れメロス」双方の主人公像を「内的独白」の有無によって比較し、テ

クスト内において葛藤する内面を吐露する点において「走れメロス」の主人公は「近代的な「勇者」」として造形されている、と結論づけている。しかし「走れメロス」においては主人公メロスが一人の人物として造形されているというより、語り手の操作によってメロスという人物の内面が創作されて（＝騙られて）いる、といった方が正確なのではないか。一牧人に過ぎないメロスが仰々しい漢語調の語りを持つことの不自然さも、メロスの内面が語り手によって語られたものであると解釈すれば、納得できよう。

（3）「故郷」の存在

「人質」と「走れメロス」との相違点として、次に「故郷」の存在を挙げる。

引用2-A「人質」

そして三日目の朝、夜もまだ明けきらぬうちに
急いで妹を夫といつしょにした彼は
気もそぞろに帰路をいそいだ
日限のきれるのを怖れて

引用2-B「走れメロス」

結婚式は、真昼に行はれた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆ひ、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがて車軸を流すやうな大雨となつた。祝宴に列席してゐた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも怠へ、陽気に歌をうたひ、手を拍つた。メロスも、満面に喜色を湛へ、しばらくは、王とのあの約束をさへ忘れてゐた。祝宴は、夜に入つていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなつた。メロスは、一生このままここにゐたい、と思つた。この佳い人たちと生涯暮して行きたいと願つたが、いまは、自分のからだで、自分のものでは無い。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、つひに出発を決意した。

右に引用したのは故郷に戻ったメロスが妹を結婚させ、再び王城への帰路につくまでの場面である。「人質」においては妹の結婚式の様子などは一切描かれないまま、メロスAは「気もそぞろに」王城へと戻る。

ところが「走れメロス」では、メロスBが妹の結婚式のため奔走する様から結婚式当日の様子までが詳しく描写されている。そして故郷への愛着から出発を迷い、煩悶する。これらの描写は「人質」にはなく、「走れメロス」のみに存するオリジナルな部分である。ここから何が言えるか。

名誉のため王城へと走るメロスBが戦争へ向かう青年のアナロジーになっていることは前述の通りである。しかし挙国一致的な精神昂揚を狙った国策文学において、死地へ赴くのを「迷う」ことなど許されない。迷いに言及することは、そのまま青年たちの足を留まらせることに繋がるからである。しかし「走れメロス」では「迷い」を描くことで正義のために死に向かう青年の未練、情が表現されており、その

ことが戦争の背後にある市井の人々の姿を暗示することにも繋がっている。

「名誉」のために死ぬ「勇者」を志向していたメロスだが、その志向には死地に赴くことへの迷いが内包されており、「走れメロス」中の記述にはその心象をも描出されていたのである。

（4）群衆に讃えられたのは誰か

「走れメロス」と「人質」との最終場面を比較したとき、群衆の反応にも違いがあることがわかる。次に、メロスが刑場に辿り着いた場面を引用する。

引用3-A「人質」

がやがやと群衆は動揺した
二人の者はかたく抱き合つて
悲喜こもごもの気持で泣いた
それを見て、ともに泣かぬ人はなかつた
すぐに王の耳にこの美談は伝へられた
王は人間らしい感動を覚えて
早速に二人を玉座の前に呼びよせた
しばらくはまぢまぢと二人の者を見つめてゐたが
やがて王は口を開いた。「おまへらの望みは叶つたぞ
おまへらはわしの心に勝つたのだ
信実とは決して空虚な妄想ではなかつた
どうかわしをも仲間に入れてくれまいか
どうかわしの願ひを聞き入れて
おまへらの仲間の一人にしてほしい」

引用3-B「走れメロス」

群衆の中からも、歔欷の声が聞えた。暴君デイオニスは、群衆の背後から二人の様を、まじまじと見つめてゐたが、やがて静かに二人に近づき、顔をあからめて、かう言つた。

「おまへらの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほしい。」

どつと群衆の間に、歓声が起つた。

「万歳、王様万歳。」

この場面における王の台詞は両作品ともにほぼ同じであり、邪知暴虐の王が発するこの台詞によって、「走れメロス」は大団円を迎える美談であると称されてきた。長きにわたり国語教材として採用され続けている理由の一つでもあると言えよう。

しかしここにおいて、「走れメロス」と「人質」には見落してはならない重要な違いがある。「人質」において群衆に讃えられるのはメロスとセリヌンテイウスであることが読み取れるのに対し、「走れメロス」では明らかに王が喝采を浴びているのである。メロスとセリヌンテイ

ウスとのやり取りを見た群衆は「歔欷の声」を漏らすも、その後の王の言葉に対する反応の方が明らかに大きい。メロスA、メロスB、両者に対する扱いには差があるのだ。

メロスBへの扱いがメロスAに比べて軽んじられていることは、メロスが王城へと戻る場面を見てもわかる。

引用4-A「人質」

まさに太陽が沈もうとしたとき、彼は門にたどり着いた
すでに磔の柱が高々と立つのを彼は見た
周囲に群衆が憮然として立ってゐた
縄にかけられて友達は釣りあげられてゆく
猛然と、彼は密集する人ごみを掻きわけた
「私だ、刑吏！」と彼は叫んだ「殺されるのは！
彼を人質とした私はここだ！」

引用4-B「走れメロス」

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰つて来た。約束のとほり、いま、帰つて来た。」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであつたが、喉がつぶれて嗄れた声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンテイウスは、徐々に釣り上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだやうに群衆を掻きわけ、掻きわけ、

「私だ、刑吏！　殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにゐる！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、つひに磔台に昇り、釣り上げられてゆく友の両足に、齧りついた。

メロスAに比べ、ここでのメロスBは滑稽と言わざるを得ない。「私だ、刑吏！」に始まる、メロスAに共通する台詞の前に、メロスBは既に高らかにその到着を宣言していた。にも関わらずその声はしわがれ、群衆には気づいてもらうことさえ叶わなかった。その後、最後の力を振り絞って「友の両足に、齧りつ」きながら何とか処刑を食い止めるが、その様子には「勇者」らしき威厳は感じられない。

「走れメロス」では、冒頭からメロスの様子は滑稽なものとして描かれてきた。岩崎晴彦が指摘するように、[16]「若い衆」に対しては質問するだけなのに対し、「老爺」に対しては「からだをゆすぶつて」詰問する身ぶりはいかにもスラップスティック・コメディのそれである。また戸松泉はメロスAが「意識的に短剣を武器として」王に向ったのに対し、メロスBは「偶然ふところにあった」とある点に着目し、「このふたつの物語の始まりは、冒険譚と失敗譚といってよいほどの違い」があるとしている。[17]これらの指摘はいずれも「走れメロス」における主人公メロスがいかに滑稽な人物として描写されているか、その論証となるものだろう。

しかし冒頭における描写と、後半に至ってからの描写とではその意味は異なってくる。なぜならメロスBは故郷への未練を断ち切り王城へと戻る過程を通して、「勇者」たらんとする理想を手に入れてしまった、より正確に言えば語り手によってそのような人物像を形成され語られたからである。前半においてはメロスは単なる村の一牧人である

とされ、王城に入る際の短絡的な行動も牧人としての彼の素朴さを表す効果に寄与していた。しかし死と引き換えに王城に走る過程を通し「勇者」としての理想を得たメロスを滑稽に描写することで、メロスの中での理想と現実のギャップが浮き彫りになる。それは「勇者」としてのメロスを否定する効果を持つ。

さらに、メロスにとっての理想と現実のギャップは、その処遇によって一層顕示されることとなる。心中に迷いを内包しつつもメロスが走ったのは「正義」のため、「勇者」となるためであり、それはすなわち王に殺されることと同義であった。しかし王の心変わりによって罰を受けることはなくなり、メロスが覚悟していた筈の「死刑」は最終的に与えられない。群衆の「王様万歳」の声が示すように、メロスが「勇者」として讃えられることもなくなったのである。

引用5「走れメロス」

ひとりの少女が、緋のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、気をきかせて教へてやつた。

「メロス、君は、まつぱだかぢやないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

（古伝説と、シルレルの詩から。）

物語の締めくくりとして付されたこの部分、特に末尾の一文によって、「走れメロス」は「美談」として受容され続けて来たと言える。しかしこの場面は、メロスにとっての理想と現実のギャップを最も象徴的に表すものでもあるのではないか。疾走の果てに、メロスは一少女の行動とセリヌンテイウスの言葉により全裸であったことを暴露される。「勇者」と「まつぱだか」という二語の対照性が、何よりもメロスの滑稽さを物語っていよう。語りに注目した文脈においてとらえたとき、末尾の一文は「含羞」[18]などといったものではなく、メロスへの皮肉といった響きを禁じ得ないものになり得るのである。

実際は「まつぱだか」であるにも関わらず「勇者」であると称され、「美談」の主人公として語られていく。このメロスの姿に同時代を生きる若者が表象されているとするならば、その結末は、全体主義の名の下に数多の青年を死地へと送り出していた当時の国家イデオロギーを無価値化する批評と受け取れる。

おわりに

以上、同時代的状況を背景として「走れメロス」を読解した。「走れメロス」はその明るく向日的な物語内容が「太宰らしく」ないということから、かえって余計にその明るさや円満なラストを迎える感動的な内容に注目され受容されてきた物語であると言える。しかしその内部には当時の時代状況に対する批評が読み取れることもまた事実である。そのことを確認して今一度、第二節で引用した太宰の随筆を振り返ると、「今のこの時局」において、「おほらかな、強い意志と、努めて明るい高い希望を持ち続ける」ことを若者に訴えかけた身振りもまた、時代に対する冷ややかな眼差しの裏返しのように読める。

安藤宏は太宰没後五十年記念シンポジウムの中で、昭和十年代文学への評価に際しては「戦争に賛成したか、加担したか、反抗したかという、そういう証拠を作中から探して切り貼りして、それで以て文学史を切り貼りするようなパラダイムというのは、もう克服すべき」だと発言している。[19] 安藤は続けて「十二月八日」をめぐる議論[20]についても触れ、重要なのは賛成、反対といった二項対立のみでテクストを断じることではなく、太宰が言葉によって戦時体制とどのように距離をとっていったのか、その様態をあぶりだすことだと提言している。戦時体制との関わりに限らず、太宰のテクストはその総体において多分に複雑かつ多義的である。そのような表現に向き合うとき、安藤の成した指摘は一つの指針となるものであろう。

「走れメロス」をその背景となった時代性と共に読解した論考は他にも存する。例えば、「走れメロス」は検閲を通過するために古典に材を取り、なおかつ「喜劇精神」を発揮した民話を「再創造」した作品であるとする論[21]、また「走れメロス」の物語内容に「現実を変容させる力への期待」を読み取り、「同時代の悲観的なデモクラシーを否定する、思想的価値」を見出す論[22]などである。本論では主人公メロスが当時を生きていた若者たちの表象であると解釈し、原典との比較を行うことで、「走れメロス」の表現そのものを時代性という視座から照射することを試みた。国家によって自由な表現、自由な言葉が奪われていった時代において、太宰の表現はどのような可能性を内包したものであったのか。それは現代においてこそ、模索されるべき可能性である。

注

（1）長谷川泉「「走れメロス」鑑賞」『国語通信』昭和三十四年五月／東郷克美「『走れメロス』をめぐって」『國文學解釈と教材の研究』昭和三十四年五月　など

（2）引用は『現代日本文学全集４８』（昭和三十年十一月　筑摩書房）に依った。

（3）黒古一夫『戦争は文学にどう描かれてきたか』平成十七年七月　八朔社

（4）中川雄介・加藤千香子「「爆弾三勇士」と男性性―〈モダン・ボーイ〉から〈日本男子〉へ」（細谷実編『モダン・マスキュリニティーズ』平成十五年所収）

（5）中内敏夫『軍国美談と教科書』昭和六十三年八月　岩波書店

（6）阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史２　モダニズムから総力戦へ』平成十八年十二月　日本経済評論社

（7）杉田英明「〈走れメロス〉の伝承と地中海・中東世界」『比較文学研究』平成八年十二月

（8）角田旅人「「走れメロス」材源考」『香川大学一般教育研究』昭和五十八年十月

（9）太宰には戦争に言及した作品が概して少ないことから、赤木孝之は「太宰はこの時にあっても時局、時流などには無頓着に生きていたようにさえ思われる」と指摘している。（「評伝　昭和十五年」『国文学解釈と鑑賞』平成五年六月）

（10）前掲長谷川論

（11）山田有策「『走れメロス』論」『中学校国語科研究シリーズ５小説教材の作品論的研究』昭和五十八年五月

（12）田中実「〈メタ・プロット〉へ――『走れメロス』――」『都留文科大学研究紀要』平成五年三月
（13）岩田英作「『走れメロス』論――小さな勇者――」『国語教育論叢』平成十七年三月
（14）高塚雅「『走れメロス』論――〈内的独白〉の考察――」『中京国文学』平成十八年三月
（15）前掲高塚によれば、ここでの「内的独白」とは、登場人物の内面の思考、印象、記憶などを焦点人物以外の語り手の介入なしに直接描写する方法である。
（16）岩崎晴彦「逆転の笑劇「走れメロス」――「神話」を「民話」に再転換する喜劇精神」『文学と教育』平成十九年十一月
（17）戸松泉「〈走る〉ことの意味――太宰治「走れメロス」を読む――」『相模女子大学紀要』平成七年三月
（18）相馬正一「太宰治「走れメロス」試論」『日本近代文学』昭和五十一年十月
（19）安藤宏「「語り」の力学」長野隆編『シンポジウム太宰治　その終戦を挟む思想の転位』平成十一年七月　双文社出版
（20）昭和十七年発表の「十二月八日」は太平洋戦争開始の日を舞台としたテクストである。時局に迎合した戦争礼賛的小説だとされる一方、時局に対する批評的な側面も指摘されており、安藤はこうした相反する二つの解釈をめぐる研究動向が一面的なものに陥りやすいことを指摘している。
（21）注16に同じ
（22）勝田真由子「王の法と語る身体――「走れメロス」論――」『阪神近代文学研究』平成二十年六月

付記　太宰の作品、随筆からの引用は全て筑摩書房版『太宰治全集』（平成十年五月～平成十一年五月）に拠った。

（やすはら　あかね、広島大学大学院博士課程前期在学）